

Title	もの言う枕：身辺の民俗と文学
Sub Title	The pillow that talks
Author	池田, 弥三郎(Ikeda, Yasaburo)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1963
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.14/15, (1963. 1) ,p.33- 46
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	西脇順三郎先生記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00140001-0033

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

もの言う枕

——身辺の民俗と文学——

池田 弥三郎

一 民謡の論理

二 枕の とが

三 男を待つ女

四 枕こそ知れ

一 民謡の論理

民間に歌われて、口から口へ伝承されて行く歌謡の類は、一つ一つには、さして難解な語句はないのだが、歌全体を一つのまとまりとして受け取ろうとすると、文句の運びは意外に無責任で、通常の解釈では納得のいかないものが多い。特にわれわれが芸謡と名付けているところの、芸能に伴なって発唱される歌謡は、その解釈がはなはだむずかしい。

芸謡の詞章には、言わば、演者のアドリブ式の発唱が固定したとみるべきものが多いから、生活のくまぐままで、まるきり変ってし

まった今日からは、当時、詞章の飛躍の空隙を理めていたはずの聞き手の予備知識を、改めて発掘して、詞章の非論理的運びの蔭に、論理性を見付け出すことは、はなはだ困難なことと言わねばならぬ。

たとえばここに、あまねく人に知れ渡った「かっぱれ」というものがある。人に知れ渡ってはいるが、実は「かっぱれ」という語そのものの意味もわからない上に、詞章はまことに支離滅裂である。

かっぱれ、かっぱれと囃したてて、文句らしい部分にはいると、まず紀文の業績をたたえようというつもりで歌い出したかと思われる文句があり、それがたちまちに豊年踊りの文句に変わり、最後はどういうわけか、子守唄になる。支離滅裂の極である。

もっとも日本の芸能は、「デテイルの芸術」といふべき特色を持っていて、部分が全体と関係なしに、独立独歩の効果を發揮したりする。それは日本芸能の鑑賞法として観客は十分に心得ていなければならない。^④ことに歌謡の場合は、全体との関係でなく、一部分の文句や語が、有力に働くことが多い。そういう聞き方に習熟することを要求されているのが、聞き手である。

かっぱれの中段「豊年踊り」の部分は、

豊年じゃ	万作じゃ	1
あすは旦那の稲刈りに	………	2
小束にからげてちよいと投げた	………	3
投げた枕にとがはない	………	4
おせせの コレワイサノ	………	5
坊主にゃ珍しや その情かいな	………	6

となっている。これは『日本音曲全集』によったのだが、こういう文句は小異が多く、ことに「6」の部分は違っている。それはともかくとしても、この文句の運びは、2から3への移りもはっきりしないし、3はあすの稲刈りでの予想を言っているのか、旦那の稲

刈りをあすに控えた今日のことを言っているのか、わからない。ことに、どうして3のあとに、「投げた枕にとがはない」などという文句が、突如として出て来るのか。

もちろんこの文句が誘い出されて来るのは、3の「投げた」という文句からの連想なのだが、こんな、論理を超越した運びはない。おそらく「投げた枕にとがはない」という、世間一般に流布して、広く人の口の端にのぼっている成句があって、それが前の文句の刺激で、割り込んで来た、と見るべきである。

だが、当時の人々が聞きなれ歌いなれていた成句——形式の固定した文句——だったとして、それでは一体、「枕を投げる」とは何か。どうしてそんなことがことさらしく言われるのか。また「枕のとが」とは何か。そしてどうして枕にとががあるとかないか言うことが問題になるのか。

それらのことが明らかにあって、はじめてこの歌の、発唱者における矛盾のない論理が説明出来るはずである。

二 枕のとが

枕とは、もちろん単に寝室のありふれた小道具にすぎない。ごく平凡な、ありふれたりふれたものだが、それにしては「枕」という語は、エロチックな刺激を持ちすぎているようだ。それは、近世における遊里の生活が、文芸類に取り入れられて行くうちに、有力にそういう刺激を持つようになったらしい。だからそれは、生活そのものではなく、文芸の上での生活であり、文芸が生活に先行し、生活の類型を導いたと見ていい。つまり、文芸の上の生活の知識が、逆に実生活をリードして、枕という語の連想が、枕をして、単なる小道具にとどめておかなくしてしまった、とみるべきであろう。

それでは「枕のとが」とは何か。

びんのはつれば枕のがよ。それをお前にうたぐられ、つとめじゃえ、苦界じゃ、許さんせ。

この有名な小唄は、男にとがめられた女の弁解である。女のびんがほつれていたのを、男が、別の男との行動の結果だろうとがめた。それを女は、罪は枕にあると、枕のせいにして、言い開きをしている歌である。おそらくこの小唄の盛行の後に、これを踏まえて出来たものだろうと思われるどいつに、

びんのほつれは枕のとがよ。顔のやつれはぬしのとが。

というのがある。これは、枕にかこつけて言いのがれたばかりではなく、鋒先を、うたがった当の相手に向けて、やつれさせたのはあなたが来ないからだ、二つのとがを並列させたもので、技巧的だが不真面目な言い草である。

びんのほつれ、もしくは髪のはぐれは、男との行動の結果だと、歌の上では前々からきまっていた。

しんく島田に 今期結うた髪を、さまが乱しやる。是非もない——山家鳥虫歌

そういう、言い逃れようもない原因を、ことさら枕の罪だと塗りつけて、苦しい言いぬけをするわけだが、それならどうして枕にかこつけるのか。

実は、浮薄な行動のあととは歴然としていて、「枕のとが」だなどとは、誰も信じてはくれないのだが、歌の上での弁解には、恰好な文句としての「枕のとが」という語が、人々の耳になれていた。それは、びんをほつれさせた「とが」ではなく、そのもう一つ前があった。歌の上の常套的な文句として、別の「枕のとが」が先行しており、その文句の流布によりかかって、意味を転用したのが「びんのほつれは枕のとがよ」の使い方である。女の弁解の文句としての「枕のとが」の初見は知らないが、もう一つ前の使い方を、かくのごとく転用した、最初の歌い手は、大衆の知識の裏をかいた意味において、かっさいをはくしたのであろう。

それではもう一つ前の「枕のとが」とは、何か。次の歌謡によって、それがやや明らかになるであろう。

君が来ぬとて 枕な投げそ。投げそ。枕にとがもなや

——ぬめり唄

りんき心か。枕な投げそ。投げそ。枕にとがはよもあらじ。

——隆達節

この歌、想像すれば、男が来ないと言って、ヒステリックになって、枕にあたり散らしている女のそばに、その女の朋輩か、多少とも年かさの姐さん株の女性がいて、それがなだめたり、たしなめたりしている、という光景であろう。恋愛生活、結婚生活には、日本の民俗として、そうした位置の指導者がいたらしいが、これが歌謡の上に現れると、いわばわけ知りの、既経験者となって、雄弁に口をきいている。右の一章はほとんど同じものと見ていい、そうした一類の中のものである。

君待つと わが恋いおれば、わが宿の簾動かし、秋の風吹く

——額田王

風をだに恋うるは羨し。風をだに来んとし待たば、何か歎かむ

——鏡女王

この、妹と姉との、万葉集における有名な唱和にも、既に、そうした位置の女性が示されている。

だから、かくし男か忍び男の存在の証拠となりかけたびんのほつれを「枕のとが」だと言い抜けた一つ前に、枕には何の罪もありはしないと、たしなめる先輩のことばの中に出て来る「枕のとが」という常套文句があったのだ。

ひと夜来ねばとて、とがもない枕を。たてな投げに。横な投げに。なよな枕よ。なよ枕。

——閑吟集

枕にあたり散らす女、それをなだめたしなめる女の存在が、ますますはっきりしている歌であろう。だから、「かっぱれ」の豊年踊りの挿入句は、こうして人口にのぼり、耳によくはいついていた文句なのであって、「投げた枕にとがはない」とは、歌謡の上に伝承されてきた周知の常套句であった。

しかし、それなら何故、枕にあたり散らすのか。男が来なかったことへのりんき心の発動が、ひたすら枕に向っていくのは何故か。もっとも同じ閑吟集に、

とがもない尺八を、枕にかたりと投げ当てても、さびしや、独り寝。

とあって、これは尺八のとがのようだが、しかしこの場合は、尺八にはとがはないが、枕にはとががある。しゃくだと枕に、尺八をぶつけた本人の反省だから、この本人は、枕にとががあると思っていることになる。

三 男を待つ女

日本の結婚の形態の有力なものは「むこ入り」であつたから、男が女のもとにかよう、というのが、男女関係でのもっともありふれた形であつた。男が女のもとを訪れる、従つて、女は訪れて来る男を待っていた。

平安朝を頂点とした女性の文学は、男女関係における「男を待つ女」の境遇を、有力な素材としている。

やすらわで寝なましものを。さ夜ふけて、かたぶくまでの月を 見しかな

——赤染衛門

今来むと言いしばかりに、あかつきの有明の月を 待ち出でつるかも

——素性法師

素性法師の歌は、もちろん題詠的な、他人の境遇に身を置いての歌で、いわば小説であるが、男を待つ女の境遇を題材とした「男を待つ女の歌」は、日本文学の中で、かなりの領域を占めている。

こういう女の境遇が近世では遊里の女の生活の上にうつされて来る。近世の生活では、ことに有力な「男を待つ女」たちは、遊里にいる女たちであつた。もちろん一般の民衆の生活にあつても、男を待つ女たちもいたのだが、歌謡の上にその生活を投影しているの

は、主として遊里の女たちであった。

そういう、古今を通じての、男を待つ女たちは、ただべんべんと男を待っているだけではなかった。第一には、来るか来ぬかをうらない、第二には、大げさに言えば招魂の呪術を行ない、もしくは男が来るようにとの願いをこめたまじないを行なった。

わが背子が来べき宵なり。ささがにのくものふるまい　かねてしるしも

——衣通郎姫

くもが巢をかけている行動に、早くも、今宵、男が訪れて来ることを予知しているのである。

故もなく　わが下紐の今解くる。人になしらせ。ただに逢うまでに

——万葉集

下紐は、ただちに下着の紐のことではなく、古代の信仰的生活では、男女の間で、相手の魂を結びとめておいた、その紐のことである。その紐が自然にほどけたということは、相逢うことの予兆であった。

この同類の歌謡は、後までずっと引き続いている。播磨の民謡に、

殿が来る夜は宵から知れる。裏のお池の鴨が立つ。

とある。これなどはなかなか格調があるが、一方ではぐっとくだけで、そしてエロチックな連想への効果を意識して、次のような民謡になった。

主の来る夜は　宵から知れる。しめたしごきが　そらどける^①

そうした予兆をただ喜ぶだけでなしに、もう少し積極的に、男を招き寄せようとする、祈願の呪術もあったらうということは、想像される。

肥前国の有名な領巾振山は、松浦佐用媛がこの山に登って、新羅に向う大伴狭手彦の船に向って、領巾を振って、別れを惜しんだところからその名がおこったという地名の起源説明がある。しかし、ただ別れを惜しんで領巾を振ったというだけでは、地名の起源としては少し薄弱であり、後代的に過ぎる説明のようである。おそらくは、折口信夫先生が言っておられるように「領巾の威力で、狭手彦の船を招き返そうとしたという、肝腎の点が落ちていいるのではなからうか」と思われる。⑥ 領巾とは、早くから装飾として用いられていた服飾の一部だが、同時に古代においては信仰的威力を持ったものであった。おそらく袖もそうであって、袖を振ることは、単に遠くにいる人への合図や挨拶として始まったことではなかったらう。

呪術的能力を供えていた古代の女性たちは、自分の許を訪れて来ない男を、単にうらなうだけではなく、積極的に招き寄せる手段も講じたものであらうと思う。そしてその呪術的動作が、奏効する場合もあったらうし、不成功に終る場合もあったであらう。

額田王の、先にあげた「君待つと」の歌も、君が来たかと思えば、そうではなくて、ただむなしく、秋風がすだれを動かして吹き過ぎたというような、今風な鑑賞にはいつて来る歌ではなくて、君を待つとて、君を招き寄せるための呪術を行なってみたが、その呪術は効を奏せず、不成功のしるしとして、かぜが吹きすぎた、というのかも知れない。かぜは、天然自然の「風」と、感胃の「かぜ」とのほかに、もう一つ、「魔風・恋風」というような変なかぜがあることを、今野円輔氏は注意しておられる。⑦ ただちにこれをもって説明できないまでも、妹と姉との「かぜ」を主題としての唱和には、忘れられた創作動機がありそうに思われる。

近世の歌謡には、「筆のかさ」あるいは「筆のさや」をたくという文句が散見する。

筆のかさ　　たいて待つ夜の蚊やり火に、さっと吹き来る涼風に……——江戸小唄。

筆のさや　　たいて待つ夜の蚊やり火に、むつまじ中の　　ことのはに……——上方地唄。「新大成絃の調」より

夜や更けて、誠に文も聞の伽ぎ。筆のさやたく煙さえ、らちもなかつの　　しらむ東雲。——清元かさねの一節

(ただし、「筆のさやにて蚊やりさえ云々」と、詞章に小異がある。)

歌謡から歌謡への伝承途上に、その背景の民俗を忘れてしまった、さりげない文句になっているが、「筆のさや」をたくのは、男を待つ女の所行で、たきながら、小倉百人一首の「来ぬ人をまつほの浦の夕企ぎに」を、三度繰り返すのだ、というまじないを、東京の下町ではまだ忘れきつてはいない。——もし、この結果として男が来たら、男と口をきく前に「やくやもしおの身も焦れつつ」を三度繰り返さねばならぬという。——筆のさやにそうした呪的威力があるとした理由はわからないが、女から男への文を書いた筆、とでもいうのだろうか。「誠に文も闇の伽ぎ」あたりに、かすかにその印象を残している。

四 枕こそ知れ

男を待っている女が、ただ腕をこまねいて待っているだけでなく、来るか来ぬかということをつらなうのに、枕をもつてした、ということが想像できる。

元来、枕とは靈魂のやどり場所であった。まくらという語の語源を解剖しても、さして役には立たないだろうが、まくとは、おそらく「ま・くら」ではなく、「まく・ら」という成り立ちの語であろう。おそらくは、ござの様なものを巻いて作ったものであろうから、威力のある靈魂を巻きこんで作ったものである。あるいは「まく・くら」だとする語源説もあって、威力ある靈魂のやどり場所であるそれを、頭にあてる、頭をそれに置く、そういう神座である、という語だとも説けるであろう。枕を頭に接触させることが、その中に宿っている靈魂を、人体に移すことになった。

だから、人の膝を枕として寝るということも、後世のそのように、

せくな。騒ぐな。天下の事は。しばし美人の膝枕

といった、エロチックな刺激を持ったものではなかった。朝廷において撰した公式の漢文の史書に、ことさらに、膝を枕として寝るということが、記録されているのである。

時に天皇、皇后の膝に枕して、昼、寝す。…… — 垂仁紀五年冬十月

俄にして、準別皇子、皇女の膝に枕して、もって臥せり。すなわち語りて曰く、「さざきと、はやぶさと、いずれかとき」と。…

… — 仁徳紀四十年春二月

既にして、穴穗天皇、皇后の膝に枕して、昼に、酔いて眠り臥したり。ここに眉輪王、その熟睡せるを伺いて、刺し死せまつる。

… — 雄略前紀

とりわけ意味深く思われる記録は「大鏡」にある。藤原兼家が、当時近づけた賀茂のかんなぎがあつたが、この者は託宣する時に、「ふしてのみ、ものを申ししかば、うちふしのみこ」と世人が呼んでいた。そしてこれが託宣する時には、兼家は自分の「御膝に枕をせさせてぞ、ものは問わせたまいける」というのである。

枕に頭を置いて、仮睡の状態にはいると、枕に宿っている靈魂がその者に移って、そして神意を語り伝える、という段取りになつたのであろう。膝を枕にすることは、そうすることによって、やはり靈魂が移り宿つたということになるのであろう。

枕という身辺の調度品の名称は、一方において抽象的な語となつて、枕詞・歌枕・枕言などという語を生んでゐる。しかし、すでにこれらについては、折口信夫先生が説明しておられる。

歌の生命標となるものなるが故に歌枕であり、生命標として据えられるが為に枕詞であり、歌にとって生命とも見える大切なものなるが故に枕言と言われた。…… — 「日本文学の発生 序説」

古代生活における信仰的な「枕」は、一方においては、単なる調度品となつて行つたのだが、しかも、民俗的なその信仰はすべて忘

れ去られたのではなかった。枕は、男が来るか、来ないかを知っていると、誰もが思っていた、

来る来る来るとは、枕こそ知れ。のう枕。もの言わうには、勝事の枕。

——閑吟集

次の歌になると、自分の恋の悲しさは、枕だけが知っている、という訴えになっているが、「枕こそ知れ」という、歌謡の上の文句は、やはり一步前に、自分の恋の行く方は、枕だけが知っている。自分にはどうなるかわからないが、といった気持ちがある。

枕こそ知れ。わが恋は、涙かからぬ夜半もなし。

——淋敷座之慰

そして枕は、ただ知っているだけではなく、男が来るか来ないか、その恋が成就するかしないかを、答えてくれたのである。

しきたえの 枕動きて夜をも寝ず。思う人には 後も逢うもの

——万葉集

しきたえの 枕動きていねられず。もの思う今宵は 早も明けばかも

——同

枕は「動いて」男に逢えることを教えてくれたのである。

そして、そういう枕の能力は、「枕はものを言う」ことが出来るとさえ信じさせることになった。ものを言う枕の印象は、歌謡の上に濃く現れている。

思い出す夜は枕とかなる。枕もの言え。焦るるに。

——淋敷座之慰

これは一人寝のさびしさを、枕と語りあかそうというつもりだろう。この主題は古来の歌の上に多く見られるところだが、「枕もの言え」と言ったところに、歌謡の世界で作り上げて来た空想の固定がある。枕は「動く」とか、くるりとまるであらぬ方を向いてしまったりして、「ものを言う」わけなのである。^⑨

恋の行方を知ると言えば、枕に問うも、つれなかりけり

——関吟集

つれなしとは、後世の「情がない」という意味よりも、この場合やや古風に、知らん顔をしている、ととつた方がよくわかる。自分の恋の成り行きについては、幸福でないと見えて、枕はだめだと言わねばかりに、知らん顔をし、冷くそっぽを向いているのだ。

家に来て わがやを見れば、たま床のほかに向きけり。妹が木枕

——万葉集

妻が死んだ時の柿本人麻呂の歌で、つれない枕の向きは、昔から問題になっていたことが知れる。

そして枕がものを言うということは、男と女との痴話喧嘩にも、枕が引き合いに出されることになった。

寝たか 寝ぬのは 枕が証拠。枕もの言え。はれやかに

——ひなの一ふし

はれやかに、というのだから、浮気をとがめられた女の歌で、自信があるところから、枕に証明させようというのだろう。この歌とよく似たどどいつで、

寝たか 寝ないか 枕に問えば、枕もの言た。寝たと言た。

というのが、これは、女の浮気が枕によってばれてしまったという、多分男の側からのものだろう。しかしここらになると、歌の気分は、享樂そのものに陥ってしまう。

なお、同類のものに、

寝たか 寝なんだか 枕に問えば、枕正直 ドッコイショ 寝たと言た。

というのもある。(但馬の民謡。「民謡風土記」より)

枕についての、こうした一連の歌謡を排列してみると、「枕のとが」ということも、かなりはつきりして来る。びんをほつれしたのは枕のとがだという前に、来るべき人が来ないのは枕のとがではないという言い方がある。そして、枕にあたり散らすのは、枕があなただけは今夜は来ないと、無情冷酷に答えたからである。

付記 芸文学会における講演「ものいう枕」と『日本風俗史講座』に書いた「芸能に現われた性風俗」の一部とをまとめて本稿をあらたに書きおろした。(三七・八・九)

註① かつばれのかっは接頭語。ほれは「掘れ」であろうと、折口信夫先生が言っておられた由、戸板康二君から聞いた。かつばれは、住吉踊りの願入房主の踊りから出ているが、住吉踊りとはもと御田植の神事に由来している。「かつ掘れ」説は、一番妥当性がある。

註② 拙著『芸能』の中で、「デテイルの芸術」としての歌舞伎劇を論じたことがある。

註③ 山中共古翁の『砂払』の中に「俚謡解」があり、潮来節として、この歌があげてある。そして、

さて本文、情人の来る夜は自然と下帯の解ることにて知れるといえるは、万代和歌集、藤原恒子うたたねに待ちや明かさん。下紐の解けぬる宵は 枕だにせずとある。そして中国にも例のあることを述べて、最後に、

しかしして何故に自然と下紐の解ぬるかは、説無きにあらねど、天機をもらすの恐れあれば、記さず。

とある。

註④ 折口信夫『万葉集辞典』。全集第六卷二七六頁。

註⑤ 今野田輔「魔風・恋風」。『日本人物語』二四六頁。

註⑥ 全集第七卷一九二頁より。

註⑦ 大正年代に少年期をすごしたわたしなどは、信じぬながらも、ねる時に、枕を六つたたいておけば、翌朝六時に枕が起きてくれるとして、枕をたたくところまではした。